角川書店　スニーカー文庫『BLOOD+ 01　ファーストキス』
著：池端亮　イラスト：箸井地図
本文p10～40より

1

空の青が流れて、一瞬、音が遠くなった。
浮いた体の下、背中すれすれをバーが通りすぎる。
跳んだ。
そう思った直後、かかとが硬いものに触れるのがわかった。
ぼすっ、とマットに体が沈む。
「惜しい！」
ポニーテールにたばねた髪を揺らし、身もだえする香里の声を聞きながら、寝ころんだ身を起こす。地面に落ちたバーは、砂漠に棲むめずらしい蛇が、天敵にねらわれて硬直しているみたいに見えた。
土に落ちる影が濃い。今日も暑かった。
タンクトップの裾をなおしてから、小夜はマットから降りた。少年のような、というにはいくぶん長い髪が、汗ばんだ額にくっついているのを、指で横によける。
「残念だったね。でも、気を落とすことないよ。これ跳べたら、全国レベルだもん」
「そうじゃないの」
「え？」
ぎゅう、と何かをしぼるような音がした。
自分のおなかに向けられた香里の目を意識しながら、小夜は白い歯を見せた。
「おなかすいた」
またか、と香里の表情が納得をしめしていた。
いつも、そうなのだ。自分の体のことなので、小夜もなれている。
コザ商業高校のグラウンドのわきには、どこの高校もそうであるように、よくとととのえられた樹木の植えこみがある。幅広い団扇のような葉をもつ羊歯植物や原色の花びらは、ひょっとしたら沖縄という風土ならではのもので、本土の高校生が見たら奇妙に感じるのかもしれないが、この島から出たことがない小夜からすれば、ごくありふれた景観にすぎなかった。
湿度が高いとはいえ、やはり木陰はいくらか涼しい。
香里とならんで、芝生に腰をおろした小夜は、スポーツバッグの中から出した弁当箱のつつみを開いて、両手をあわせた。
「いただきまーす」
その声がおわらないうちに、右手ににぎられたピンクのプラスチックの箸が、待ちこがれていたように動きはじめる。
スポーツドリンクを口にしながら、こちらを見つめる香里のまなざしは、テレビの動物番組で、チーターがインパラを追いつめ、その首にかぶりつく一連の動作――ようするに、食欲という原理に突き動かされて動物が発揮する機能の迫力と美しさに見とれているようだ。

もちろん、そういう目で見られることに、小夜はとっくになれている。
「おなかがすいて、思いっきり力が出せないなんて、小夜らしいよ」
「うーん。それもあるけれど、全力出すのを体がいやがってる、っていうか……そんな感じがするんだよね」
「それがなければ、とっくに国体行ってるか。それよりさ」
香里のくちびるが、恨みがましげに突きだされた。
「それだけ食べて、ぜんぜん太らないってのは、どういうこと!?」
「さ、さあ。どういうことかな」
「こっちはダイエットで悩んでるってのに、うらやましいやつめ！」
「ちょっと、お弁当！」
いきなり抱きついてきた香里の、やせる努力など必要ないであろう体をまともに受けて、小夜は背中から芝生の上に倒れてしまった。もちろん、弁当箱を落とさないように、必死で腕をかかげながら。
そのとき、大気の振動が、小夜の視線を上空につれ去った。
校舎の裏からあらわれた巨大な金属の鳥が、耳ざわりな轟音を地上にまきちらしながら空を引き裂いていく。
それを追って、さらに大きな航空機が、真っ黒な影をグラウンドに落としつつ、小夜の視野を通りすぎていった。

「大きな飛行機」
「あれ、爆撃機だよ」
「ばくげきき？」
「爆弾を落とす飛行機。アメリカ軍は、沖縄からいつも戦争に行くんだって。ベトナム戦争のときも、ここから飛行機が飛んでいったんだってさ。基地で働いてるお母さんが言ってた。ほんとうはいやだけれど、アメリカ軍がいるから、わたしたちも食べていけるって」
「わたし……よくわかんないな」
「そっか。そうだよね。小夜は……」
香里が言葉をにごした。
小夜には、一年前よりも以前の記憶というものが、ない。
記憶喪失などという病名はなんだか大仰すぎるし、普段の生活の中でとりたてて大きな不自由があるというわけではないのだが、やはり折にふれて、欠落感をおぼえずにはいられなかった。自分のことを知らないというのは、とても不安だ。
「小夜」
呼び声に振り返ると、グラウンドから校舎へとつづく階段の上に、制服姿の少年がたたずんでいた。
赤みがかった茶色の髪に、端整だが野性味のつよい目鼻立ち。カイだ。
「病院の時間」

「はーい」
もうそんな時間だったのか、とあわてながらも、箸を動かす手は止めない。たまご焼きとエビフライをいっぺんに口に入れ、さらに残ったお米をまとめて頬ばると、咀嚼しながら弁当箱を片づける。
「カイ先輩に送ってもらえるなんて、いいなぁ」
「そう？」
と言ったつもりだが、口の中がいっぱいで声にならない。荷物をバッグにしまうのを手伝ってくれていた香里の右手がのびて、頬に触れた。
口の横に、米粒がくっついていたらしい。
「もと野球部のエースだし、今でも、ねらってる女の子多いんだよ」
「ふうん。知らなかった」
東洋人にしてはかなり色白であろう小夜の頬から、薄い小麦色に焼けた香里の手によって運ばれた白米が、彼女のふっくらしたくちびるの隙間に消えた。
「明日の競技会、朝からだからね」
翌日にひかえた市主催の陸上競技会は、県大会の前哨戦といってよかった。
その結果は、三年生が引退したあとの部の代表選考を左右するはずだ。ふだんの記録からすると、小夜にも、じゅうぶん可能性はある。
「うん。じゃあ、また明日」

バッグをかかえて、立ちあがった小夜は、小さく手を振って走りだした。

部室で制服に着替えてから、野球部のグラウンド裏に行くと、いつものように、カイはバイクのシートに浅く腰かけて待っていた。

「いつもごめんね」

「いいって」

「帰りはバスで帰るから」

「ああ。ほら」

投じられたヘルメットを頭に載せながら、小夜は長い脚でバイクをまたぎ、カイの背後から腰に両腕をまわした。

「カイ、野球やってたんだってね」

「おまえがうちに来る前に、やめちまったよ」

口調からは、なんの思い入れも未練も感じられなかったが、急発進したバイクの排気音が、舌打ちのように聞こえた。

カイの背中に額をつけるようにして、風をよける。

「お父さんのところに引きとられて、もう一年になるのに、まだ知らないことばっかりなんだなぁ」

「昔のことなんて、関係ねぇ。親父だって、そう言ってるだろ。俺たちは家族、血のつながりはなくたって、今は家族なんだ」

「そう……だね」

密着したカイの背中は、わずかに汗でしめっている。強い風の中で、シャツの布地越しの体温が心地よかった。

この一年間、この背中に、何度、励まされただろう。

あのとき、記憶をうしなった赤ん坊のような状態で（言葉もしゃべれなかったというから、自分でもびっくりする）、小夜は宮城家にやってきたのだ。

もちろん、小夜自身、そのころのことははっきりとは憶えていないのだが、カイや弟のリク、それに彼らの父親であるジョージは、突然降ってわいた新しい家族に対して、いつもやさしかった。

とはいっても、カイは口が悪いし、ジョージも気が長いほうとはいえないから、喧嘩もあった。けれど、その何十倍もの笑顔が、小夜のこの一年間をいろどってきたのだ。彼らといっしょに食事をするとき、買い物に出かけるとき、テレビ番組をながめながらのなんでもない会話をかわすとき、そうした時間の累積が、自分に家族としての自信をあたえてくれたのだと、小夜は確信している。

海沿いの国道に出ると、とたんに潮の香りが濃くなった。

コンクリートの防波堤の向こうには、白い砂浜とトルコ石のような海が一望できる。ゆらめく波の上に、太陽のかけらが白くおどっている。

この海の景色が、小夜は好きだ。
沖に突きだした大きな岩の、落ちついたたたずまいに、不思議と安堵をおぼえる。波しぶきで身を洗いながら、その岩は、いつも変わらず、そこにあるのだ。
わざわざこの道を選んだのは、カイなりの気づかいにちがいない。
「ありがと」
兄の背中に、小夜は小さくささやいた。

――次のニュースは、名護地方で起きた連続通り魔殺人事件の続報です。警察の調べによりますと、犯人は被害者の女性を鋭利な刃物で襲い、殺害したものとみられますが、遺体の発見現場に血痕が残されていないことなどから、被害者はべつの場所で殺されたのち、現場に運ばれた可能性があるとの見方が――。
「どうですか、音無さん。何か思いだしました？」
さっ、とカーテンが横に動いて、清潔な白衣があらわれた。
クリーム色の天井を凝視しながら、なんの気なしにラジオに耳をかたむけていた小夜は、点滴の針が刺さっている右腕に注意しながら、ベッドに寝かせていた上体を少し起こした。
「いえ、何も」
「そう。それじゃあ、おわるまで安静にしていてくださいね」
「はい」

宙吊りになった点滴バッグの残量と腕時計を見くらべてから、にこり、と微笑した女医は、沖縄では特段めずらしくもないが、若い白人である。おそらく度が入っていないであろう眼鏡が、知的な美貌に、ともすれば冷たさを加味しているように感じられた。
その冷たさにふさわしく、そっけない挙措できびすをかえし、カーテンの向こう側へと去ってしまう。こつ、こつ、と低いヒールの靴音が遠ざかっていった。
ジュリアという名前だけを、小夜は知っている。
養父であるジョージの知己で、優秀な医師であるらしい。彼女を信頼して、ジョージは小夜を、大きな総合病院ではなく、このこぢんまりとした医療施設に通院させているのだ。
完全予約制ということもあって、外来の患者を見かけることはほとんどない。その経営方針が閉鎖的ともとられるのだろう、近所での評判も、医師の容貌をのぞけば、あまりいいとはいえなかった。
それにしても、ここに通うようになってもうずいぶんたつが、記憶の空白が埋まるようなきざしさえもなかった。こうしてほどこされる点滴の薬剤も、効力があるのかどうか。ただ、ちくりと少々痛い思いをして、ベッドでまどろみ、ジュリアと短い会話をかわす。それがルーティンとなってしまっているような気がする。ずっと、このまま何も変わらないような……。
それでもかまわないと、小夜は思う。
「……なるようにしか、ならないよね」

病院を出たときは、まだ空は青かった。
秋口とはいえ、まだ夏の名残が強い季節、わけても赤道に近い日本南端の県を照らす太陽は、なかなか勤勉だ。
「小夜姉ちゃん」
停車したバスのステップを降りたとたん、背後から声がかかった。
振り返ると、手にさげたコンビニエンスストアのビニール袋をゆすりながら、リクが、小走りに商店街の歩道をやってくる。
ときどき女の子に見まちがえられる柔和な面立ちに、わずかな風にもさざめく栗色の髪、そして絹に似た頬。文字どおりの、かわいい弟を、小夜はバス停で迎えた。
「どうしたの？　おつかい？」
「うん。お父さんに頼まれて。お姉ちゃんは、病院の帰り？」
「……ん、そう」
返事がややうわの空になったのは、意識が聴覚に集中したためだ。
水分の豊富な大気に、たおやかな旋律が乗って、鼓膜をひかえめに愛撫していた。
バス通りから少し奥まったその界隈は、自動車の喧噪もすくなく、音は自由にあたりをただよっている。花屋の店頭に生けられたシンビジュウムやアマリリスの花たちが、うっとりと聞き惚れ、香りの吐息をもらしていた。
聴覚に遅れること半秒、視覚も弦の調べを追って、道路をはさんだ反対側の歩道に吸い寄せられる。
人垣の隙間から、奏者の姿が見えた。
暗色の背広につつまれた長身が、街路樹の花壇に腰かけている。その顔立ちは、彼が奏でる音にふさわしかった。二十代の後半だろうか。西洋人のようだが、よく見かけるアメリカ人とはどこかしら差異がある。品位、とでもいうべき繊細さが、その切れ長の双眸や高い鼻梁から見てとれた。
ヴァイオリンかと思ったが、はるかに巨大な弦楽器が、青年の胸の前をななめに縦断している。弓をあやつる右手が包帯におおわれているのが、痛々しかった。とても、怪我をした手で演奏しているとは思えない音色だが。
「なんだろう……不思議」
心をおだやかにする音楽、というのではない。ただ、何か引きこまれるような……。
知らず、小夜はまぶたを落としていた。
闇――。
水底の深い紺碧に似た闇を、光がゆらめかせた。
のびやかな音の波にみちびかれて、ぼんやりとした情景がひろがる。
見たことがない場所。
半円アーチ型の廊下の先に、出口がある。左右の壁は、なんて古びて、威厳があるんだろう。

まるで何世紀も昔から、その身を蔦で飾っているみたいだ。
どこからか、チェロの音が聴こえる。
その音色にみちびかれて、進む。光がまぶしい。
石壁に鉄格子がはめられている。抜ける。奥へ。
ひやりとした空気、湿ったにおい。どこかで、水のしたたり。
螺旋階段をのぼって、上へ。上へ。
廃墟のような暗がりに、扉があった。
分厚く、錆びた金属で補強され、ひどく頑丈そうなその扉に、手をのばす。
――だめ。
開けちゃ、だめ。
のびた細い手が、把手をつかんだ。金属のきしみ。

「だめっ！」
ぶつり、と映像がとぎれた。
目を見ひらき、必死で何かを止めようとした小夜の手は、空をつかんだ。
空振りした腕の勢いにつられて、花壇のッッジに頭から飛びこんでしまった。弱い小枝が、ばきばきと折れる。
「だ、だいじょうぶ？」

「……う、うん」
リクの手を借りて身を植えこみから引っこ抜き、制服についた葉をはらいながら、耳が真っ赤になっていくのがわかった。
「どうしたの？　急に」
「なんでもない。行こう」
悲鳴に近い声だったらしい。通行人はもちろんのこと、車道の向こう側からも、もの問いたげな視線を、いやというほど感じる。
演奏のじゃまをしてしまったのだろうか。弓を止めた青年が、聴衆とともに、こちらを見つめているのをはっきり意識しながら、小夜は早い歩度でそこを離れた。

ＯＭＯＲＯというのが、店名だ。
宮城家の自宅の一階部分を占有している、大衆酒場のことである。
もっとも、店名よりも、常連客や近所の住人にとっては、「ジョージの店」のほうがなじみ深いだろう。それだけ、店主は慕われているのだが、看板の「ＯＭＯＲＯ」の文字の下に、「宮城ジョージの店」と添え書きしているセンスだけは、どうなんだろう、と小夜はずっと思っていた。
むろん、小夜がこのうちに来たときから、その看板は店頭にかかげられていたわけで、くわしい由来は知らないが、あの陽気でいつも自信たっぷりのジョージのことだ、きっと自分の名

前を目立つところに書いておいたほうが気分がいいとかいって、店をはじめるとき、内装なんかよりも先に決めてしまったにちがいない。

見栄っぱりなカイなどは、ださいから消せ、と文句を言いそうなものだが、黙認しているところをみると、父親の感性についてはとうに匙を投げてしまったのかもしれない。あるいは、いつものように、げんこつで黙らされた、とか。

沖縄の繁華街なら、どこでもふつうに見られるが、BAR&RESTAURANT&COFFEと英語の記載もあるのは、米軍関係の客のためである。退役兵というジョージの来歴もあって、OMOROに来店する客層にアメリカ人や基地関係の人間が占める割合は、ふつうの居酒屋などの比ではない。

店の正面にある児童公園の前に、見おぼえがあるセダンが停車していた。

その運転席で、棒状のチョコレート菓子をかじっている太った黒人男をちょっと見てから、小夜は入口のドアノブに手をかけた。

「ただいまー」

「おう、おかえり、小夜。リクもか」

「うん。バス停のところで会ったんだ。はい、これ」

「サンキューな」

カウンター越しに、リクから手渡されたビニール袋を受けとり、ジョージは洗い場に向かった。ビニール袋から、バンダの顔の形をした黄色のスポンジを出して、妙な顔をする。

「なんだ、これ。台所用のやつだって言っただろう」

「それしかなかったんだよ」

スツールに腰をおろしたリクが、冷水器の注ぎ口にコップを押しつける。

「まあ、いいか」

こどもの入浴用であろうスポンジに、洗剤をたらして流しのステンレスをごしごしやりはじめるジョージの背中は、筋肉質で、現役の兵隊にも見劣りしない。髪が白くなりはじめた今でも、腕っぷしの強さはかなりのものだ。酒が入った客同士のもめごとには決まって仲裁に入り、ものわかりがよくない者には少々苦痛をともなった帰宅を強いる。相手が何人だろうと、ジョージが喧嘩で負けたところを、小夜は見たことがない。

そのジョージの浅黒い顔が、ちょっと振り返った。

「腹減っただろう、小夜。すぐ晩飯だからな」

「うん。あれ？」

入口からみて左側、カウンターの向かいにある円形テーブルにバッグを置いて、弁当箱を出した小夜は、たいへんな失態に気がついた。

「シューズがない！　どうしよう、学校に忘れてきちゃったんだ」

「明日、競技会だったか？　競技場に行く途中で取りにいけばいいじゃないか」

「無理だよ。小夜姉ちゃん、早起きできないもん」

「うるさい」

カウンター席で両脚をぶらぶらさせているリクのおしりを軽く蹴っとばしてから、小夜はその足を今入ってきたばかりのドアに向けた。
「取ってくる！」
「今からか？」
「すぐもどってくるから、晩ごはん待っててね」
「ああ。気をつけろよ」
「せったい待っててね、ごはん」
ドアを引きながら、肩越しにそう念を押した小夜が、前に顔をもどすと、そこは黒い壁だった。
いや、背広だ。禁欲的な黒いスーツの胸が、目の前にある。
「きゃっ」
ちょうど店内に入ろうとした客と出くわしてしまったのだ。どん、と正面衝突して、よろめいた小夜は、肩をささえられて転倒をまぬがれた。
長身の男だ。きちんと第一ボタンまで留められ、タイで拘束されたワイシャツの上から、鉄でできたような男の顔が、冷えた視線をこちらに落としている。
なんてこわい目をしてるんだろう。小夜は一瞬、息をつめた。
「……あの、いらっしゃい。デヴィッドさん」
「……」

無言のまま、デヴィッドの視線もまた、動かない。
小夜も、動けなかった。まるで、足が凍えたようだ。
「うちの娘に何か用かい、デヴィッドさん」
ジョージの声で、ようやく氷のまなざしが逸れた。
カウンターに片肘をついたジョージの仏頂面は、到底、客を歓迎するものではない。普段は呼び捨てにしているデヴィッドに対して敬称をつけて呼んだのも、威嚇に近く聞こえた。
「話がある」
顔が鉄なら、声は石をこすりあわせたようだ。
「リク、上でテレビでも見てろ」
「うん」
スツールを立って、奥の戸口へ向かうリクの足どりは、どこか不安そうだ。
それは、小夜も同じである。
ジョージの古い知友と聞いているが、デヴィッドという人間は、どこか得体が知れない。柄が悪いとか、不快だというのではなくて、その態度や雰囲気に、ありふれた生活の匂いやあたたかみが感じられないのだ。
よっぽど気がかりな顔をしていたのだろうか。ジョージが苦笑した。
「忘れもの取りにいくんだろ？　早くしないと、先に晩飯食べちまうぞ」
「うん……いってきます」

夏は陽が長いとはいっても、午後八時をまわれば、空も夜の色合いである。
案の定、学校の正門は閉まっていた。
下校時間はとっくにすぎているし、部活動の練習をしていた運動部の生徒たちも、さすがに帰路についているだろう。
「やっぱり、閉まっちゃってるかー。どうしよっかな……」
言い訳するように独りごち、ちらちらと四隣に目をくばる。
だいじょうぶ。近くに通行人の姿はない。
意を決して鉄柵の上に手をかけ、地面を強く蹴る。
「ごめんなさぁい」
門扉を乗り越えがてら、だれにともなく謝罪し、小夜は数時間ぶりに、コザ商業高校の敷地に立った。
正門を入ってすぐ右は、外来者用の出入口、その奥が職員室だ。窓は、まだ明かりで白い。
シューズを忘れたとすれば、部室だろう。見とがめられると面倒なので、職員室の横をすばやく通りすぎ、運動部の部室がならぶグラウンド側へ向かう。短い階段をのぼり、図書館と校舎をつなぐ二階の渡り廊下の下をくぐった、そのとき。
小夜の脚は硬直した。
眼前に人影がある。

まるで、闇から溶けてあらわれたようだ。
教師ではない。
夜空と近しい色彩の着衣。ひどく背が高い若者だ。つややかな長髪に、白皙の美貌。どこかで見たことがある。そう、あのチェロの奏者。
「やっと会えた」
静かなつぶやきに、かすかな歓喜のひびきを感じた刹那、小夜の目は、青年の右手に釘づけになった。
真っ白なきらめき。刃。ナイフだ。
背筋に電流がはしる。息がつまった。
――犯人は、被害者の女性を鋭利な刃物で襲い、殺害したと――
脳裏に再生されたラジオの音声が、耳の奥のほうで、きぃーん、とノイズになった。
青年の靴が、土を摩擦する音に、小夜は我に返った。
悲鳴も出なかったが、体は動いた。
はじかれたように体を反転させ、逃げる。とにかく、だれか、助けを。
無我夢中で走って、外来者用の出入口にたどりつくなり、倒れこむようにガラス扉を叩く。
「だれか……」
声がかすれた。呼吸がままならない。
不意に、肩に触れた重みに、心臓が跳ねあがった。

「いやぁ！」
「うおっ、と！」
身をちぢめて振り返った小夜の前で、灼けた鍋の縁でも触ったみたいに、右手をひっこめたのは、壮年の男である。
学年はちがうが、たしか体育の教師だ。ジャージパンツの腰の部分に、小さく「稲嶺」と名前が刺繍されている。
「せ、先生……」
「大声あげることないだろうに。どうした、こんな時間に？」
「先生、あの、変な……あやしい人が」
ふるえる指先がしめした方角に、稲嶺の顔が動いた。
「あやしい人？」
「あっちの、グラウンドのほうに」
「よし、ちょっと待ってなさい」
職員室の中で休んでいるようにいわれたが、ほかに教師もいない無人の部屋に取り残されるのは心細かった。凶器をもった不審者の存在はおそろしかったが、ひとりで待っているのは、さらに不安だ。
けっきょく、頼れる大人といっしょにいることを、小夜は選んだ。
稲嶺の背中に隠れるようにして、来た道をもどる。

高架式の渡り廊下をくぐり、先ほどの場所に来たが、そこは無人であった。
もうひとつ、体育館と校舎を連結する渡り廊下があるのだが、そこまで進んでも、人間の気配はない。
「やっぱり、だれもいないぞ」
懐中電灯のまるい光が、地面をなめる。
と、稲嶺がやおら跳躍した。
棒立ちのまま、小夜の視界から消えたのだ。
膝をまげるような予備動作もなく、まるで、夜空に吸いこまれたような動きだった。
彼の体が真上に跳ぶ寸前、屋根の上から腕のようなものが伸び、頭をつかんだように見えた。
だが、そんなことがあるだろうか。
ぼきぼき、と何か硬い、湿り気をおびたものが破壊される音響。
頭上にいるのだ。何かが。
「せん……先生？」
乾燥しきった喉に唾液を嚥下して、慎重に声をかける。
返答はなかったが、彼はもどってきた。
いびつな人体となって。
どさり、と地べたに落ち、奇異な姿勢で寝そべった稲嶺の首は、蛇のようにやわらかく一回転し、背中の側から、小夜を見上げている。

「あ……」

声を発するやり方を、声帯が忘れてしまったらしい。

頭が朦朧として、重力がおかしな具合に作用する。よろよろと後退したのはわかったが、足をからませて尻餅をついたのは、その衝撃よりも、おしりに感じる土の冷たさで理解した。

そのとき、あきらかに死体であることを主張している教師の体が、何か黒いものでおおわれた。

一瞬、大きな毛皮のようなものが、渡り廊下の屋根から落ちてきて、死体を隠したのかと思った。

そうでないとわかったのは、その毛皮が動いたからだ。

振り向いたそれは、人間に似た形をしていた。

だが、どんな大男よりも巨魁で、その形骸はあきらかに獣の特徴をそなえている。発達した肩の筋肉と、それにつらなる両腕の太さは、大の男を片手で屋根の上に吊りあげることを容易にやってのけたにちがない。

横顔は、原始的な猿のようでもあるが、その牙のするどさは、どうみても肉食獣のそれだ。

それに、ある種の爬虫類のような、紅い目。

怪物だ。

どこをどう走ったのか、ほとんどおぼえていない。

ただ、死にものぐるいで両脚を動かしているうちに、外来者用の出入口がすぐ前にあった。

無意識のうちに、明かるいほうへと走っていたのかもしれない。

ガラス扉にすがりつくようにして、小夜が把手をつかんだとき、夜気が爆発した。

「や……」

とっさに耳をふさぐ。なんて耐えがたい音だ。髪の毛や着衣が振動するのがわかった。体を吹き飛ばされそうな、空気の波。

咆吼だ。あの化け物の叫びなのだ。

まるで、音叉が共鳴するみたいに、ガラスの表面が震えたかと思うと、あっという間に粉砕して、扉に背をつけていた小夜は、内側に倒れこんでしまった。

音はやんだが、脳にはまだ残響が刺さって、聴覚野をはげしく苛んでいた。

「痛っ」

立ちあがりかけて、小夜は右足の痛みに眉をひそめた。

スカートからのぞくふとももに、真っ赤な線がはしっている。ガラスの破片で切ってしまったのだろう。深い傷ではなさそうだが、床に血が描いた水玉模様を見ると、気が遠くなった。

これじゃあ、明日の競技会は棄権したほうがいいかな……。

そんなことが、頭をよぎった。

しかし、一瞬のことだ。落胆も、傷口に応急処置をほどこすという現実的な行為も、許されなかった。

枠だけになってしまった扉をはさんだ外側に、黒々とした影が蠢動している。
血と同じ色をした両眼が、こちらを見た。
小夜は手で傷口をおさえて、職員室に飛びこんだ。
冷房のきいた室内を突っ切り、反対側の扉から、校舎に入る。背後で、スチール扉がひしゃげ、職員用の机から書類などが落下する物音がした。
廊下の曲がり角を折れ、数歩を進めたところで、小夜は立ちすくんだ。
まっすぐにのびる暗い廊下を背にして、長軀の人影が佇立している。
窓から射しこむ月明かりが、白い美貌をなでる。
バス停で、そして先ほどは校庭で邂逅した、あの若者だ。肩からさげている棺のような箱は、楽器を収めているものだろうか。
そして、右手にきらめく短剣の刃。
「……」
状況を把握するのに、数秒を要した。
目の前の連続殺人鬼、そして、うしろから迫る人喰いの怪物。
絶望というのは、こういうことをいうのかもしれない。
どん、と床が揺らいだ。
目で確認するまでもなかった。背中を圧迫する質量感と生ぐさい臭気が、凶暴な獣の存在を知らせている。なかば、小夜の上におおいかぶさるほどの距離だ。

包帯で隠された青年の右手がひらめいたのは、その刹那である。
銀光が、小夜の右頬をかすめた。
身動きも、まばたきさえもできなかった。
耳を聾する絶叫に驚き、首をうしろに向けると、化け物がのけぞっていた。左の眼窩に突きたった短剣の柄頭から、ぼたぼたと血がしたたり落ちる。
ふつうの動物なら、たとえライオンやホオジロザメでさえ、痛みにひるんだだろうが、その化け物はちがった。腹立ちまぎれに振るわれた腕が、小夜の髪をなびかせる。
猛禽類のそれを思わせる鋭利な爪が、豆腐でも断つみたいに、コンクリートの壁面に深い傷を彫りこんだ。
思わず、その場にへたりこみかけて、ふらふらと後じさった小夜の眼前に、青年の広い背中が横からすべりこんできた。
ほぼ同時に、怪物の、今度は狙いすました爪の一撃が、空気をうならせる。
青年はよけなかった。
華奢ではないが、けっして屈強とはいえない彼の右手が、丸太のような腕を受けとめた。
がっちりとからみあったふたつの手を見て、小夜は呆然とした。
青年の右掌を覆いかくしていた包帯がほどけて、蛇のぬけがらみたいに床に落ちている。布の下からあらわれたのは、暗褐色の硬い皮膚に鎧われた、獣の手であった。
「何……なんなの？」

痙攣するくちびるからもれた問いは、小夜の心境そのものである。
いったい、なんなんだろう。この怪物、それにこの男は。
組みあった両者の膂力は拮抗しているように見えたが、彼らの動きが停滞したのは、ごくわずかな時間にすぎなかった。
片手を封じられた怪物が、もう一方の腕を若者の顔面に叩きつける。
重く硬い音がして、チェロケースがかぎ爪をはじき返した。革の下に鉄板で補強でもしてあるのだろうか、おそろしく頑丈だ。
間髪をはさまず、青年の長身が反転し、右脚が相手の脇腹をとらえた。一見、無造作でさえある蹴りは、しかし斧でも叩きこんだかのように、怪物の巨軀を吹き飛ばした。
横倒しになって廊下を転がる化け物を一瞥もせずに、青年はきびすを返した。
「こっちへ」
「え？」
抵抗はもちろん、疑問を口にする暇もなかった。すっと身を寄せてきた彼が、すこし身をかがめた直後、たくましい両腕によって、小夜の体は、予想以上に軽々と持ちあげられていた。

小夜がふたたび、自分の足で床に降りたのは、三階の生物教室の中であった。
棚に陳列された瓶は、生物標本だ。月の色に染まったホルマリン溶液の底で、哺乳類の胎児や白くなった両生類が物憂げに泳いでいる。そのほか、昆虫標本や剝製など、ありふれたものたちが、室内の沈黙に敬意をはらうかのように、じっと棚の中で凝固していた。
沈黙をやぶったのは、小夜のささやきだ。
「あれは……あれは、何？」
化学薬品による反応を防止するため、黒い特殊な塗料で着色された机の影にしゃがみこんで、そう詰問する。
「翼手」
なれた手つきで、ハンカチをふとももの傷に巻いてくれた青年が、淡々と応じた。
「よくしゅ？」
「生き血を喰らう、けだもの」
「けだもの……」
だとしたら、そのけだものと同じ手をもつこの人は、何者なんだろう。
ついさっき、翼手と彼が呼んだ怪物をたやすくあしらい、小夜とチェロケースという、人間ひとりにまかされるには重すぎる荷物をかかえて、飛ぶように階段を疾駆した様子は、とても常人のようには感じられなかった。
青年の右手が、チェロケースの留め金をはずした。
十字架のような、翼をひろげた鳥のような装飾がほどこされた蓋が開き、楽器の姿があらわれる。ニスで磨きこまれた飴色の表面は、陶磁器のようだ。小夜はクラシック音楽のことも、楽器の歴史もよく知らないが、そうとうの銘品なのではなかろうか。

青年は、チェロには手を触れず、蓋の内側に指をすべらせた。
ばしっ、とバネがはじけるような音とともに、ベルベット生地の中央に意匠された装飾部分が、左右に跳ねあがった。
その内側に収納されていたのは、一振りの刀――？
貴婦人のような弦楽器と同居するには、あまりにも血なまぐさい代物だ。
一定の長さ以上の刃物を持ち歩くことを、この国の法律はみとめていない。そう聞いたことがある。隠していたのだろうか。
それを鞘ぐるみ取りあげた青年が、すばやく鯉口を切る。
すう、と暗闇に伸びた白い刃を、彼の右手がつかんだ。
「な、何するの？」
獣じみた形状の右手が横に移動し、ガラスのような刃紋の上を、赤黒い液体が流れた。
赤いしずくを床板にこぼしながら、その右手が小夜に向けられた。
「何……？」
自分で自分の手を切るなんて、まともじゃない。あんなに血が出ている。こんなことをして、どうしようというのだろう。
小夜は、恐怖に目をみはった。
青年は無言のまま、赤く濡れた握り拳を顔に近づけてくる。ぽたぽたとしたたる血が、白い制服の胸を汚した。

目と鼻の先にせまった異形の手を止めたのは、小夜の拒絶ではなく、廊下から響いた禍々しい叫喚であった。
青年の冷静な両眼が、教室の前の出入口に流れる。
ドアが内側に蹴倒され、ぬっと肩から出現したのは、翼手、あの化け物だ。
左目に刺さっていた短剣は、抜き去られている。傷は深かったはずだが、もはや痛みさえも忘れたような風情だ。
いや、痛み自体、もうないのかもしれない。深々と穿たれた傷口の肉が、沸騰するかのようにうごめくのを、小夜は見た。以前、この生物教室のプロジェクターで見せられた、菌類の増殖の様子を思いだす。見る間に破損した組織が再生し、最後に、皮膜の下から浮きあがった眼球が、ぐるり、と回転して、焦点をむすんだ。
はっ、と小夜が息を呑んだのと、怪物が飛躍したのが、同時であった。
天井に背をこすり、一気に教室を突っ切った巨体が、騒音をまいて着地する。
机の天板が割れ、振動で棚からふり落とされた瓶やガラス容器が、我先にと粉々になった。
もし、青年に抱かれて横に押し倒されていなければ、自分も机ごと踏みつぶされていたかもしれないと思い、小夜はぞっとした。
前傾した怪物の上体が、こちらに向いた。視線が合う。感情らしい感情もない、ただ野性の本能のままに餌をもとめている目だ。
逃げなければ、早く！　殺されちゃう！

仰向けに寝ころがった姿勢のまま、無我夢中で手足を動かす。上になって自分をかばってくれた青年の存在も、ほとんど忘れていた。

「小夜」

つぶやくような呼びかけが、小夜の視線を青年に引きよせた。

あたたかいてのひらが、頬をなで、やや強引にあごを上げさせた。

みずからの右手を口にあてた青年が、顔を近づけてくる。何をするつもりなのか、その見当がついたときには、もうその行為はなされていた。

はじめての口づけは、血の味がした。

青年のくちびるがはなれて、また名前を呼んだ。

「小夜――」

茫乎としたまま、口の中に残された血を飲みこむ。吐きだすことができなかったのは、なぜだろう。その液体が喉を通って、さらに体の深い部分に浸透していく。

「――戦って」

心臓が高鳴った。

自分の血管の中、皮膚の内側を流れる血液の脈動をつよく感じる。

刹那、脳の芯のほうで、紫電がはじけた。

角川書店　スニーカー文庫『BLOOD+ 01 ファーストキス』
著：池端亮　イラスト：箸井地図
本文 p10 ～ 40 より

©2005 Production I.G・Aniplex・MBS・HAKUHODO